

悪役神官の俺が騎士団長に囚われるまで

Characters

イヴオン・デュノア

国教会最高位の主教であり、治癒魔法能力者。
前世の記憶を思い出し、
なんとか破滅の結末を避けるため、
主人公の恋路を
邪魔しようとする。

オウギュスト・コデルリエ

近衛騎士団副団長で討伐騎士団の団長。
以前から黒い噂を聞いており、
イヴオンのことはよく思っていない。
質実剛健な人柄の持ち主。

エロワ

神殿騎士団の
団員でヒーラー。
柔和な物腰で
思慮深い性格。

フルニエ

近衛騎士団、
討伐騎士団の団員。
弟気質で甘いものや鳥が好き。

王太子

サイタマンタラ王国の王太子。
博愛主義の優等生タイプ。

イリス

神殿騎士団の団員で
攻撃魔法使い。
物静かで
好きな人には一途。

ユベル

近衛騎士団、討伐騎士団の団員。
陽気で積極的、感情的な一面もある。

アオイ

ゲームの主人公。
精霊に認められた浄化者。

目次

悪役神官の俺が騎士団長に囚われるまで

7

番外編 それぞれの後日談

345

悪役神官の俺が騎士団長に囚われるまで

王宮内の第二謁見室、通称白磁の間。

限られた数名の見守るなか、部屋の中央に引きだされ、緊張に震えて跪く青年が一人。国王の任を受けた王太子がその元へ近づき、青年の背後に立つ白い法衣の俺は、縦長の窓から差し込む光を浴び、長く淡い金髪を焔めかせ、藤色の瞳に薄い微笑を湛えて目の前の光景を見つめていた。その俺へ王太子が問う。

「イヴォン主教。たしかにこの者なのか」

「さようでございます。アオイが浄化の能力を秘めていることは、神官一同のみならず、精霊達も認めているところでございます。しかしながらいまだ力を発揮することができず」

恭しく答えた俺から、跪く青年へ視線を戻した王太子は首を傾げる。

「発揮できるほどの魔力がないのだろうか。魔力供給してみたらどうだろうか」

青年に顔を上げるよう命じた王太子は身を屈め、その者にキスをした。すると青年の身体が青白く発光した。

「――っ」

仄かな光はまばゆいというほどではない。しかしながらその光を目にした周囲の者は驚き、どもめきを上げた。ただ一人、俺を除いて。

「さすが殿下でございます。殿下の御導きによって、アオイの浄化者としての力が目覚めたようです」

俺は澄ました顔をして、だが内心冷や汗ダラダラで高らかに告げた。

俺は前世の記憶を持っている。

日本男子として生まれ育ち、三十半ばで交通事故死するまでゲーム関連会社に勤め、プログラミングを生業としていた。

といっても思いだしたのはついさっき。この部屋へ入る直前のことだ。

そして数分前に気がついた。

この世界、知ってるぞと。

ここは俺が制作に関わったBL系恋愛シミュレーションゲーム「溺愛騎士団と恋の討伐」の世界そのものじゃないか、と。

ゲームはよくある十八世紀ヨーロッパ風の、魔物や精霊、魔法が存在する世界。大陸の中央に位置する王国、サイタマンダラではここ数年各地で魔物が徘徊し、その吐き出す瘴気で民は苦しんでいた。魔物は攻撃魔法や剣によって一時的に倒すことができて、まもなく復活してしまう。完全

に倒すには、魔物の動力となる瘴気を浄化する「浄化者」の力が必要だった。魔力を持つのは国民の中でも限られた一部。さらに浄化の能力を持つ者は伝承にあるのみ。国教会が国中を探して見つけたのが、辺境の地で暮らす平民の青年、ゲームの主人公となるアオイだ。

精霊により浄化者と認められたアオイだったが、彼は魔力量が少なく、王宮に連れられた時点では能力を発動できなかった。しかしヒーラーである王太子からキスによる魔力供給を受けると、浄化能力を使えるようになる。ここでいうヒーラーとは治癒魔法能力者ではなく、魔力の保有者間で魔力供給する能力を持つ者のことをいう。

アオイはヒーラーから魔力供給されないと浄化能力を使えないと判明する。そのため能力を使うたびにキスという形でヒーラーが魔力供給をする必要がある。

そこで討伐隊として特別編成された騎士団には、ヒーラーが四人組み込まれる。

攻略対象者は全部で五人。その内の四人が討伐隊に参加するヒーラー達で、最後の一人が王太子。国教会最高位の主教であり治癒魔法能力者であるこの俺、イヴォン・デュノアは悪役だ。

アオイは騎士団と共に魔物討伐に向かうのだが、旅のあいだに愛を育んだ相手と結ばれる。悪役である俺も旅に同行し、彼らの恋路の邪魔をする。そして最終的に瘴気に呑み込まれ、魔物と同化し、アオイ達に倒されることになる。アオイがどの攻略対象者を選んでも、俺が辿る運命は同じ。ただしアオイがどの攻略対象者とも結ばれず、ノーマルエンドの道を辿った場合だけは俺が魔物と同化することもなく、国は平和になり、アオイは一人で故郷へ帰る。俺も騎士団員達も、それまでの通りの生活に戻るようになる。

つまり、俺の取る選択肢は一つ。

アオイが攻略対象者達に関心を持たず、また、攻略対象者達のアオイへの好感度を上げないように邪魔をすること。

はー。どうしようかね、まったく。

前世の俺は人畜無害な社畜であり、今世の俺もほぼ社畜。色恋沙汰には関わらず生きてきたし、他人の恋愛など興味はない。そんな男になにができるというのか。

もうほんと、なんでこんなことになったと頭を抱えたい。

だが頭を抱えていても事態は好転しない。未来は高確率で破滅が待っている。誰にどう思われようと、やるしかない。人の恋路をひたすら邪魔して悪役を貫くんた。ゲーム制作に関わり、内容を知り尽くしている俺ならどうにかできる——かもしれない。

……。できる、のかな……

いや、うん。できなかつたら死ぬだけだ。頑張ろう。

俺が記憶を思いだしているあいだにも目の前では話が進んでいる。現在はアオイが王太子に魔力供給され、浄化能力を覚醒させた場面。ゲーム冒頭だ。混乱し、躊躇ちゅうちよしている時間はなかった。

「では、オウギュスト。貴公を討伐騎士団の団長に任命する。ひと月のうちに騎士団の編成を済ませ、出発の準備を整えるように」

「畏まりました」

王太子の命を受けて一礼した男は、オウギュスト・コデルリエ。国内随一の剣の技量を誇る近衛

騎士団副団長であり、若くして次期団長と目される人物だ。たつたいま、特別に組織される討伐騎士団の団長に任命されたようだ。特徴は黒髪とオリブ色の瞳。質実剛健な人柄と評され、ただいるだけで周囲を威圧する雰囲気を持つ、俺とおない年の三十歳。

攻略対象者の一人だ。

攻略対象者だから当然といえば当然なんだが、クソ格好いい。キラキラして華やかな王太子と違い、寡黙で笑わないところとか、長身で逞しい肉体とか、男が憧れる男だ。

俺はオウギュスト団長を見据え、次いで王太子に向けて発言した。こはちよつと口を挟ませてくれ。

「恐れながら王太子殿下。魔物の瘴気によって、民はこれ以上なく疲弊しております。いま現在も、魔物の餌食となっている者がおりますでしょう。民も地方領主も、一刻も早い出立を求めています。どうぞ三日で。任命式、出発式なども不要です。智将と名高い副団長、いえ、団長ならば三日で出発の準備を整えられると存じます。過去には二日での前例があったかと」

ゲームでは出発準備の一ヶ月間、アオイは王宮に留まることになる。王太子を攻略する場合はこの一ヶ月の王宮生活でいかに好感度を上げるかが勝負となる。

好感度が上がると、王太子も討伐の旅に参加することになる。好感度が低ければ王太子は討伐の旅に参加しない。

だったら、できる限り早く出立してしまえばいい。

準備期間、一ヶ月もいらぬよ。うん。

だからって三日は極端すぎるだろと我ながら思うが、あえてふっかけてみた。過去には二日で出した前例があるとは言っても、その目的地は一ヶ所だけだったはず。今回は国中をまわる。関係各所とのスケジュール調整とかあるだろうし、一週間から十日は必要だろうか。

俺の提案を受け、王太子が団長に確認する。

「三日は短すぎないか。オウギュスト、可能か」

「……どうにか。ただ、兵站の準備が間に合うか。出発前に調練の時間も欲しいところですが」

どうにかって。どうにかできそうなのか。団長すごいな。

彼が属する近衛騎士団の仕事は王族の警護と王都の治安維持。第五隊あり、その中でもとくに攻撃能力の高い者が今回組隊された討伐騎士団に選出される。そこに各地方の騎士団が合流する形となる。団員を選出するのはおそらく団長だ。出発するまでは近衛騎士団副団長としての業務があり、さらに討伐騎士団団長として動かなければならないわけで、とんでもなく忙しくなるはず。

それでもできるというのならその方向でと、さらに口を挟む。よけいな口出しなのはわかってるんだが、言わせてくれ。

「調練でしたら現地です。団員の足並みを揃える時間が必要であることは、門外漢である私にも理解できます。しかし現地の騎士団員と合流してからおこなうほうが効率的かと思われまふ。現場に着いたからといって、すぐに魔物が現れるとは限らず、待機する時間もあるはずで。兵站の準備も王都でせず、現地の領主達に負担させ、野営地に赴く際に受けとるようにすれば効率がよろしいのでは。殿下からご通達いただければ領主も従うでしょう」

よけいすぎたかな。

団長、視線に圧をかけるのはやめてくれ。

自分でも、素人がなに言ってるんだよって思ったよ。早く出発する方向で話を進めたくて、つい言いたくなったんだよ。

「それはわかった。しかし……そう忙しいと、この者、アオイも落ち着かないだろう。王都へは来たばかりなのだろう？」

「殿下。浄化者へのお心遣いを感謝いたします。しかしアオイも討伐へ協力すると心固めて来たところですよ。王都に落ち着くことで討伐への意欲が削がれたりしては……。心燃えている今こそ、速やかに進むべきかと」

「たしかに」

王太子が頷き、団長へ目を向ける。

「オウギュスト、三日で手配してくれ。主教の言う通り、早く出発できるならばそのほうがよろう」

団長は恭しく拝命したのち、俺を鋭く睨んだ。

部外者の俺に指図されるのは不愉快だっただろう。俺は彼の視線に気づきながらも無視し、王太子へ再び発言する。

「殿下。その者、アオイの身柄は我が国教会の預かりとなっておりま。浄化者としての民との関わり方など伝えたいことが多々ございますので、出発までは神殿内の客室に留め置くことと予定し

ておりますことを、ご了承ください」

ゲームで、王宮に滞在させる提案をしたのは王太子だった。王太子が言いだす前に、国教会預かりであると俺から主張することで機先を制してみた。

アオイと王太子はいまが初見。まだ恋心を抱いていないはずである現状、俺に正論で切りだされたら王太子も拒む理由などないはず。

「ああ、わかった」

王太子は予想通り了承してくれた。

よし。

これでおそらく王太子ルートは潰せただろう。

うつすらと微笑を浮かべる俺の顔に、オウギュスト団長の視線が刺さる。

なにを目論んでいるのだと言いたげなまなざしだ。

普段の俺はこんな場でよいいな口を挟む男ではないからな。気持ちにはわかる。

以前より俺には黒い噂があり、彼によく思われていない。というか、はつきり言って嫌われている。彼だけでなく、彼の属する陣営の面々に。

彼のモデルリエ侯爵家は、王宮を二分する派閥、カルメ公爵側に与^{くみ}しており、俺は反対派閥デューフル公爵に関わりがあると目されている。政治とは一線を画し、中立の立場を維持すべき教会の主教であるにも拘^{かか}らず、デューフル公爵のみならず幾人かの貴族とも、主教に就任する以前から癒着を噂されている。それだけでなく、俺が主教になってから、神殿で堂々と商売をするようになって

た。まず免罪符^{めんざいふ}の導入。これは罪の大きさにより金額が変動し、国教会の大きな収入源となっている。それから聖水や護符、雑貨を販売したり、神殿の敷地内を整備して参道に仲見世を作り、その収益を吸い上げている。清貧かつ高潔であるべき主教が、金に目が眩^{くら}んだ亡者^{もうしや}になり果てたとまことしやかに噂されて久しい。

また一部では魔物を操っているのは俺ではないかなどという噂まである。王妃や諸侯を誑^{たぶら}かして金を巻き上げているとかも。

神殿の事業を拡大しているのは事実だが、身に覚えのない噂も多い。儲けていると妬まれるのは異世界も一緒だ。悪い噂を消すのは難しく、また面倒なので放置しているのだが、そんな俺の態度が噂に尾ひれをつけさせており、信憑性を高めているようだ。

清廉で高潔な騎士団長から見たら、さぞかし胡散臭い男だろう。

王太子が退室したあと、俺は澄ました微笑を浮かべて団長の胡乱^{うろん}な視線に応え、アオイを誘って早々に王宮を辞した。

アオイが王宮にいれば、王太子と愛を育む機会もない。出発日までに会うことがなければ、旅が終わるまで王太子との接触はなくなる。王太子ルートを早々に潰すことに成功した俺は密やかに胸を撫で下ろした。しかしまだ安寧には及ばない。これからが本番だ。

王宮の東、王都中央に位置する神殿は国教会の総本山であり、俺の仕事場兼住居。馬車で戻った

俺は気を緩めることなく次の策へ取り掛かることにする。まずはアオイに乗馬を教える。魔物は国中に五十体あまり跋扈^{はつこ}しており、討伐の旅は国中を巡る。その際に馬で移動するのだが、平民である彼は乗馬経験に乏しい。ゆえに旅では攻略対象者に同乗させてもらっての移動となる。

これは好感度が上昇するので避けたく、馬車を使うことにする。だがいちおう、乗馬訓練もしておいてもらう。たった三日で見違えるほど上達するものでもないだろうから期待はしていない。馬に乗る際の注意事項を覚えてもらえる程度でいい。歩かせられたら上出来だ。浄化者としての民との関わり云々などと王太子には申し出たが、そのようなことはぶっちゃけ必要ない。

馬車を降り、石造りの神殿のほうへアオイを案内する。敷地は東京ドーム二個分くらい。神殿の本殿は体育館二個分くらいと広大だ。アオイに泊まってもらう客室は神殿の奥にある。そちらへ歩きながら、俺はアオイを見上げた。

栗色の髪に同色の瞳。受け攻め両方担うキャラだけあって可愛すぎることもなく、上背もある。性格は屈託なく、素直でおとなしい。貴族の攻略対象者達が恋に落ちてもおかしくない容姿と性格、逆に言えばこれといった特徴のない青年ともいえる。

アオイを見つけたのは俺だ。というか、精霊だ。

ほとんどの人はわからないらしいが、俺は精霊の気配を感じることができる。姿は見えないが仄かな光を感じることが多い。精霊は言葉が通じないし意思疎通できないのだが、感覚的になんとなく伝わってくるものがあつたりもする不思議な存在だ。

この能力のお陰でアオイを見つけることができた。

「旅は馬に乗ることもあるかもしれませんが、アオイは乗馬の経験がありますか？」
 「うち、農家なんで、子供の頃に農耕馬の背中に乗ったことくらいはありますけど。でもあれは乗馬とはいえないですよ。騎士団の方々が乗るような軍馬は乗ったことないです」

「軍馬は大きいですが、訓練されているはずですからだいじょうぶ。なんて言っておきながら、私も上手に乗れませんけどね。出発まで、少し練習しましょうか」

微笑む俺を見下ろした彼は、頬を染めて俺の顔を見つめた。

ゲームの悪役は美形であるのが定石で、俺もその例外ではない。中性的な顔立ち、藤色の瞳、白い肌。白い法衣に包まれた細身の体躯。緩く一つに束ねた淡い金髪のは髪は背中の中ほどまでである。常に笑みを浮かべた美貌の男であり、その眉目秀麗さは傾国と評する者もいる。

そして多分に漏れず、俺も隠しキャラとして攻略対象の一人だったりする。全員を攻略したあとに攻略可能となり、俺とアオイが結ばれた際には俺が受けとなる。しかしそのルートでも俺は魔物と同化してしまう。命は助かるのだがその後幽閉され、アオイとひっそり暮らすという、俺の望むエンディングではないため、やはり目指すはノーマルエンド一択。

魔物との同化を避けたいんだったら旅に同行しなければいいんだけどな。

神殿にいても魔物に襲われる可能性はあるが、旅に同行するよりはマシだろう。
 うん。行かなきゃいいよな。行きたくないなー。

だがそういうわけにもいかない。

俺は武芸の才はないし魔力供給の能力もないが、治癒魔法能力を保持している。その力を持つ者

は稀で、王都には目下俺一人のみ。

俺も一緒に行って治癒魔法を使わないと、死者が大勢出る。それは避けたい。自分が死にたくないからって他者を見殺しにできるほど俺は図太くないんだ。それにアオイも大怪我を負う場面があり、俺が治療しないと死ぬ。アオイに死なれたら魔物を倒せる者がいなくて、ゲーム云々関係なく国の存亡に関わる。

そういうわけで、俺にも旅に同行するよう声がかかるはずだし、行かねばならない。

——オウギュスト団長は、俺と旅などしたくないだろうけれども。

神殿前まで歩いたところで出迎えにきた神官にアオイを任せると、俺は自分の執務室へ戻り、関係各所へいくつかの手配を済ませた。約三ヶ月神殿を留守にすることになるので、神官達に業務の引継ぎもおこなう。

さて。どうするか。

どういう戦法でいくか考えたのち、神殿騎士のエロワを執務室へ呼んだ。二十五歳、焦げ茶の髪に、柔らかな物腰のイケメンで、ヒーラーの能力を持つ。攻略対象者の一人となる者だ。

ゲームでは、外面は爽やかだが内面は腹黒キャラと紹介されていた。俺は実際の彼を腹黒いと感じたことはないが。

「エロワ。これから討伐騎士団が編成され、三日後に出発します。あなたには、討伐騎士団として私と一緒に来てもらうことになるでしょう。まだお達しは来ていないけれど、じき、連絡が来ます。支度をしておいってくださいね」

俺は目下の者にも、いかにも神官らしい丁寧な口調を使う。

「俺も討伐に、ですか」

神殿騎士が選ばれるとは思っていなかったのだろう。とまどった顔をする若者に、俺は微笑んで理由を説明する。

「アオイにはヒーラーが必要なんです。おそらく複数いたほうがいい。そして私が同行することはほぼ決定でしょう。そうなると神殿騎士団からも人員を出すのが道理。となるとヒーラーであり剣の腕も立つあなたが選ばれるのは必然です。それでね、今のうちに言っておきたいことがありますてね」

俺はそこで言葉を切った。姿勢を正して傾聴する彼の瞳を覗き込み、笑みを消す。

「アオイには、必要以上に関わる必要はありません。彼は任務を終えたら故郷へ帰りますから。それよりも、今後もつきあいが必要な騎士団員の動向を気にしてみてください。その中に、フルニエという青年も選出されるはずです。その者と行動を共にするよう、心がけてください」

「フルニエですか」

「ご存じですか」

「親しくはありませんが」

俺は再びニコリとしてみせる。

「ではぜひこの機会に親しくなっていたきたいものです。此度こたびのことがなくとも、我が神殿騎士団と近衛騎士団とは、もっと連携をとりあつていくべきだと常々思っていたのです。この遠征が両

騎士団交流のきっかけとなればいいと思ひましてね」

エロワは簡潔にわかりましたと応じた。

フルニエもヒーラーで攻略対象の一人だ。その攻略方法をエロワに伝授してやる。

「そうそう、フルニエを見つけたら、なんでもいいのでお菓子をあげてください。彼は甘いものに目がないそうです。それから鳥が好きらしいので、話を聞いてやると親しくなってくれるはずです」

なぜ俺がフルニエの個人情報を知っているのか、そもそもなぜフルニエなのかとは訊いてこない。俺は敬虔けいけんな聖職者然とした態度をとっているが、裏ではあくどいことをしている腹黒キアラと思われる。みんな、勝手に俺の腹の中を想像して勝手に納得してくれる。

本当は攻略対象であるエロワを連れていきたくない。しかしヒーラーで攻撃力のある彼を外したら、魔物討伐に支障が出る恐れがあるため連れていかないわけにはいかない。

エロワを帰し、その後もう一人の神殿騎士を呼ぶ。こちらは攻略対象者でもヒーラーでもない。ゲームには登場しない、イリスという二十三歳の青年だ。黒髪で、陰のある表情に仄かな色気があり、以前似たような類の依頼をしたら上手いことやつてくれたので、今回も頼みたい。俺のごり押しで討伐騎士団に入れさせてもらう。

「イリス。あなたには内密な任務をお願いします。私がアオイのそばにいられない時、彼にヒーラー達が必要以上に接触しないよう、守っていただきたいのです。近衛騎士団からユベルというヒーラーが配属されるはずです。彼がアオイに興味を持たないように、また、アオイがヒーラーに

興味を持たないように、上手く誘導してください」

「興味を持たないように、と言いますと」

「誘惑でもなんでも。誘惑するなら、できればアオイを。まあ、やりやすいと思うほうでかまいません」

攻略対象者ではないイリスにアオイを任せることにした。それと攻略対象者であるユベルの相手も頼む。

アオイは可能な限り、攻略対象者と接触させないようにしたい。そして攻略対象者の意識を他者へ向ける作戦だ。

今の俺はそれなりの権力者。一人で頑張ることはない。せっかく手駒を使えるのだから、使わぬ手はないということで頼んでみたわけだが、どうだろうか。

効果があるかは未知数だ。だって俺は前世から引き継いで童貞の恋愛未経験者だからな！

恋愛はよくわからんよ。BLゲームの世界だから女子は論外ということだけはわかるけど。上手くいかなかったらその時考えよう。

「それから出発まで、アオイの乗馬指導をお願いします」

イリスをアオイの元へ向かわせてしばらくすると、王太子から急ぎの手紙が届いた。先ほど別れたばかりの彼から何用だろうかと開封してみれば、出発までにアオイに会える時間を作れないかとのこと。

出発まで三日。実質二日しか時間がないというのに、無理を言う。王太子という立場の人間が予

定を変えて王宮から動くとなると、警備の者にも行き先の相手にも大きな負担がかかる。

ゲームの王太子は俺様キャラだったが、実際はそんな人物ではない。相手の都合も考えず、このような無理を言いだす方ではない。急にどうしたかと面食らう。

ゲームで彼が神殿に来るシーンはない。俺が強引に王太子との時間を奪ったために、軌道修正させようと、世界の秩序的ななんらかの力が働いたのだろうか。

いずれにしろ会わせるわけにはいかない。

アオイに学ばせることが多く、時間をとれないことと、討伐前でただでさえ緊張している彼に負担をかけたくないことを理由に、丁重な断りの返事を送った。

それから諸々仕事をこなしたあと、神殿北側にある馬場に出向いてみる。神殿内の馬場は広くはないが、馬を軽く慣らす程度の環境はある。

アオイはイリスの馬に同乗し、指導を受けていた。互いに真面目におこないながらも時折笑顔を見せており、二人の雰囲気は悪くない。よしよし。

俺も乗馬の練習をすべきなのだろうが、そのような時間はなかった。イリスの活躍に期待しつつ執務室へ戻り、仕事の続きをしようと椅子に腰かけたらエロワがやってきた。

「主教様。近衛騎士団副団長がいまからこちらへ来るとの先触れが」

「ほう。わかりました。いらしたら、ここへ通してください」

ここは魔法の存在する世界だが、使える者は一握りであり、魔法の種類もそう多くない。火や風を起こす、治癒、浄化など、その程度。連絡手段は手紙か、人を遣わすかの二択で、この場合は伝

言を使者が届けに来たわけだ。十八世紀ヨーロッパ的世界観なので電話もなく、前世と比べたら時間の使い方がひどくのんびりしている。

仕事の続きをしながら待っていると、オウギュスト団長が部下の一人を従えてやってきた。

こんな忙しい時期に団長自ら足を運んできたのはどんな事情か。

おない年であり俺のほうが職の位は格上だが、爵位は彼が上。椅子から立ち上がって迎えると、

彼は執務机の前に一直線に歩いてきた。威圧がすごい。敵陣に乗り込んできた武将といった感じだ。

「主教。あなたを討伐騎士団の一員に任命したい。それと一名、神殿騎士団の者を」

挨拶も前置きもなく告げ、机の上に書類を差しだしてくる。書類は二通。手にとってみると、それは二人分の任命書だった。

「私と——エロワですか」

「ああ。その者はヒーラーと聞いた。戦闘力もなかなかのものと聞く」

「そうですね。エロワは優秀ですね」

「あなたにも、浄化者の身の安全のために加わってもらう、これは国王陛下の意思でもある。拒否は許されない」

まるで俺が拒否すると思っていたような物言いだ。まさに喧嘩腰。

態度も視線も圧を感じる。基本的に圧の強い男だが、他者に関わっている様子では、もう少しマイルドだった。

王宮で顔をあわせる機会は時々あるが、ろくに話したこともない。王宮内の派閥が異なるし、式

典などの警備の関係で話がある時は、俺の護衛である神殿騎士団が打ち合わせの席に着く。面と向かってまともに会話するのは先ほどの謁見室が初めてだ。

以前から嫌われていると感じていたが、ここ数年はよく睨まれている気がする。

胡散臭いだろうが、そこまで嫌わなくてもいいだろうと、ちよつと言いたくなる。

すべての人から好かれることが無理なのは承知しているが、自分を嫌っており、しかもそれを隠そうとしない相手と対峙するのはなかなかのストレスだ。

心が削られるなあと思いつつも俺は営業スマイルを保ち、肩を竦めた。

「拒否など滅相もない。もちろんお受けします。ただ、私のほうから団長へお願いが二点あります。もう一名、団員に加えていただきたい者がいます。神殿騎士団のイリス・パシュラという者です」

「理由は」

「ヒーラーではありませんが、攻撃魔法が使えますから役に立つはずですよ」

団長は考えるように俺の顔を見つめたあと、頷いた。

「……いいだろう」

「それからもう一点。馬車を使わせてください」

「アオイは馬に乗れないか」

「私ですよ」

団長が片眉を上げる。

「そうだったか？」

「ええ。アオイはいま練習させていますが、彼のほうが上手いかもしれません。いずれにしろ慣れておりませんから、馬車が無難かと」

「馬車が通れない行程もあるのだが」

「そこはどなたかの馬に同乗させていただく形で結構です。しかしそれ以外は馬車で問題ないでしょう。初日の目的地は？」

「オーミヤだ」

「ならば、少なくともそこまでは問題ないですね。街道は広いし、陽が落ちる前に着く。日中は魔物も現れませんし」

団長は頷き、わかったと応じた。

「それだけか」

「はい」

団長は意外そうに目を細めて俺を見た。

「ではエロワと——イリスと言ったか。二人の顔を見ておきたい。紹介してもらえるか」

俺は主教補助のポールを呼び、二人を執務室へ連れてくるよう頼んだ。

団長と対面した二人は落ち着いて任命を受諾した。そんな彼らの態度を訝しく思ったのか、団長が言った。

「落ち着いているな。まるで任命されることを知っていたようだ」

「はい。主教様から事前に話を聞いておりましたから。きっと選ばれるだろうからと」

エロワの返事を聞き、団長は胡乱な視線を俺に寄越した。

なにを企てる、とでも言いたげだ。しかし彼はよいいなことは口にせず、代わりに自分の部下を紹介した。

「ロジュ・ビアル。近衛騎士団所属で、此度の討伐騎士団の副団長となる」

ロジュは焦げ茶の髪と瞳で、チャライ優男風の男。歳は俺と同じくらいか。騎士団流ではなく王宮風に胸へ手を当て、優雅に一礼する。

「ロジュと申します。呼び方は副団長ではなく、どうぞロジュとお呼びください。主教様と旅に出られるなんて、嬉しいですねえ」

「イヴォン・デュノアです。私の呼び方は主教でもイヴォンでもなんなりと」

「ではイヴォン様と呼んでもよろしいですかね」

「ええ」

団長がなにか言いたげに目を睜めてロジュを見た。それからエロワとイリスへ目を向ける。

「では三日後に」

「はい。よろしく願います」

最後に彼は刺すような鋭いまなざしを俺に向け、帰っていった。

彼が扉から出ていくと、俺はホウツと息をついた。

はあ。

無駄に疲れた。

たったこれだけのことでわざわざここへ来たのか。これだけだったら、任命書を誰かに届けさせればよかったのに。俺が拒否すると思ったたからかな。

頭を切り替え、仕事を続ける。基本的に毎日残業だが、その日は夜更けまで働いた。

翌朝、敷地内にある屋敷を出て執務室へ向かう途中、主教補助のポールが俺を呼びに来た。

「どうしました」

「王太子殿下の使者がいましております」

使者は執務室で待っているという。早朝から何事かと執務室で話を聞くと、王太子がやはりどうしても出発前にアオイに会っておきたいとのこと。時間はとらせないから、と。

物わかりのよい王太子らしからぬ振舞いである。ありえない。いつもの俺ならば、王太子からここまで求められては拒否することなど考えられず、他の予定を削って受け入れるだろうが、今の俺はいつもの俺ではない。ここで折れてはいけない。王太子の不興くらい買ってやる。

アオイは明日の討伐に向けて非常にナーバスになっている状態で、そんな彼に王太子と面会などというさらなるプレッシャーをかけるわけにはいかないと、昨日の手紙よりも直接的な物言いですんだ。

使者を帰したあと、ポールが呟くように言う。

「どうしたんでしょうね、王太子殿下。まるで恋の病にかかったように」

「やめてください、縁起でもない」

「いや、冗談ですよ？」

今その話は冗談にならないんだ。勘弁してくれ。

使者から返事を聞いた王太子からは、了解したとの連絡があとで届いたが、あまり安心できなかった。出発前からこれでは、旅はどうなることやら。

前途多難な旅の予感に不安を覚えずにはおれなかった。

出発当日。団長率いる騎士団が神殿に迎えに来た。

討伐に関わる騎士は、エロワとイリスを加えると三十三名。それに俺とアオイを加えた三十五名が騎士団員である。

近衛騎士団の精鋭を揃えたようで、団員の動きはきびきびして無駄がない。それに比べ、こちらでも速やかに馬車へ乗り込もうとしたら、団長に止められた。

「待て、主教」

「なにか」

「まだ挨拶していない」

任命式を省いたので、三日前に顔をあわせてからは、諸々書面のみやりとりで今日を迎えたのだった。改めて挨拶など不要と思いつつ向き直ると、彼は神殿組四人に向けて、とみせかけて、正面から俺を見つめた。

「このたび、討伐騎士団団長に就任したオウギュスト・コデルリエだ。旅程は約三ヶ月。討伐の詳細

細については追々説明する。旅のあいだは四人とも俺の麾下となる。元の身分に関係なく騎士団の一員として働いてもらうこととなるので、そのつもりで。よろしく頼む」

挨拶というか、旅のあいだは自分に従うようにという注意だな。いちいち圧をかけてくる。俺は腹の読めぬいつもの笑顔で応じる。口角を上げた柔和に見える顔。これは神官になって覚えたスキルだ。

「よろしくお願いします。足手まといにならぬよう頑張りますね」

アオイも挨拶して馬車に乗り込むと、団長はイリスとエロワに隊列編成を伝え、すみやかに出発した。

馬車に乗るのは俺とアオイだけで、他は馬だ。

アオイは二日間の練習で、馬を歩かせるくらいはできていた。俺も乗馬は得意ではないが、それくらいはできる。それでも馬車を使うのは、とにかくアオイを攻略対象者に近づかせないため。それに尽きる。馬車なら話しかける隙もなくなるからな。

あとで馬に乗ることになるとしても、そこまでは接触を断つことができる。

今後のことに頭を巡らせる俺の隣で、アオイは興味津々といった様子で車窓を眺めていた。

「アオイは、王都は初めてでしたね」

「はい、主教様。王都ウラーワなんて、こんな機会がなければ、一生来ることがなかったかもしれません。建物も人も、すごい」

道沿いには出陣する騎士団を見送る人々が溢れていた。ゲームの世界だが、奇抜な髪色や服装の

者はいない。

「いま向かっているオーミヤは訪れたことはありませんか。王都と同じくらい栄えた都市ですよ」

「オーミヤも初めてです。ぼくが行ったことのある街で一番大きなところはギョーダです」

「ああ、たしか、アオイの故郷は隣の帝国に近い場所でしたか」

余談だが、この国の地名は埼玉県の地名を模している。カタカナの地名は覚えにくいから、わかりやすいようにとの配慮のようだ。なぜ埼玉かという点ゲーム制作者に埼玉出身が多かったただけだ。正直、十八世紀ヨーロッパ調の世界観にはそぐわず、違和感を拭えない。

当時、一プログラマーに過ぎない俺が口を挟むこともなかったが、ゲームの売れ行きが悪かったのはこの辺りのセンスの悪さが一因だろう。

模しているのは地名のみで、国土面積や都市の位置関係などは符合していない。埼玉県の浦和から大宮までたいした距離ではなかったはずだが、王都からオーミヤまでは半日かかる。

馬に同乗する場合も半日ずっと攻略対象者と密着してお喋りする。それが何日も続くのだから、いくら俺が目光らせていたとしても、親しくもなるだろう。団員達にどう思われているか知らぬが、馬車を選択したのは正解だろう。

車窓の風景は都市部らしい四階建てのバロック建築の建物が密集して並んでいる。いかにもヨーロッパ的な街並み。広場には英雄の銅像が立ち、それを通り過ぎると凱旋門を潜り抜ける。隙間なく並んでいた住宅は徐々にまばらになっていく。王都は城郭都市であり、城壁を越えると一気に牧歌的な様相となる。

隊列は馬車の前後に騎士が半数ずつついている。イリスとエロワは馬車の後ろ。団長は馬車の前にいる。一番後方には雑務の者が数名という構成だ。

「団長って、格好いいですよね……」

窓から団長の後ろ姿が見えるようで、アオイが唐突に呟いた。

え、なにそれ。団長ルートで行く気？

俺はギョツとした。

「そう……でしょうか」

「え、格好よくないですか？ 騎士団の人、みんな格好いいですけど」

完全に同意だ。しかし、たぶんいまは同意しちゃいけない。

「アオイはあいう人が好みですか？」

「好みつていうか。自分がヒョロツとしていて、あまり筋肉つかない体質なんで。ガタイいい人つていいなあ」と

「そう……じゃあ、私みたいなのは駄目かな」

団長に行くくらいなら俺を選んでくれ。俺なら絶対恋愛に発展しないから。そう思ってた頃、霧囲気を出してみた。まさかこんなセリフを言う日が来るとは。頬が引きつりそうになったが、どうにか堪えて悲しそうに微笑んでみせると、アオイは目を見開き、顔を真っ赤にして狼狽えた。お、いけるかな。

「え、いや、駄目なんてことはないですつていうか、そういう意味じゃなく……つ」

「私も筋肉がつかない体質だから。アオイに格好いいと思ってもらえないのは残念だな……」

「いや、あの、主様はとても素敵ですつ。別の意味で憧れます……つ」

単純に男として団長に憧れるとか、そういうつもりで口にしたのだろうか。だったらいいが、攻略対象者に関心を向けないでほしい。頼むよ。

昼頃、川沿いの草地で小休憩となった。俺は外の空気を吸いに馬車から出た。草地の向こうはブドウ畑が広がっており、はるか遠くには山脈の一部が陰のようにうつすらと見える。抜けるように澄んだ青空に、心地よい風が吹く。これから魔物と戦いに行くことを忘れるほどのどかな風景。

団員達は馬に水や草を与えたり、座って昼食をとったりしている。団員の服装は制服に佩刀のみ、の軽装。イリスとエロワは神殿騎士の制服なので、近衛騎士とはデザインが違う。近衛騎士は濃紺、神殿騎士は白い布地で、どちらのデザインも格好いい。昨日神殿に、イリスとエロワ用の軽甲冑が届いた。魔物との戦闘は機敏さが必要らしく、全身を覆うものではない。そちらは戦闘時のみ着用するそうで、今は馬に積んでいる。

エロワとイリス以外の団員は俺に話しかけてこないし近づこうともしない。団長がめちやくちや警戒してるから、部下もそれに倣うよな。

昼食はパンと林檎。草地にすわってアオイと一緒に食べ、のんびり過ごしているふりをして攻略対象者の姿を確かめた。

質実剛健、笑わない寡黙キャラ、黒髪の三十歳、オウギユスト団長。

笑顔の腹黒キャラ、焦げ茶の髪、二十五歳、神殿騎士団員のエロワ。

小柄で童顔、弟キャラ、二十歳のフルニエ。
赤毛で快活な陽気キャラ、二十三歳のユベル。

旅のあいだ、魔物よりもなによりも優先して注目すべき四人である。

今世、フルニエとユベルを目にするのはこれが初めてだ。いや正確には王宮で見たことはあったかもしれないが、認識したことはなかった。

フルニエは馬に草を食ませており、エロワは団員の一人と話しながらパンを食べている。イリスは早速ユベルに話しかけていた。

アオイが用を足しに行き、俺一人になる。

エロワにはフルニエを任せた。イリスにはユベルとアオイ。

団長の担当はいない。団長は侯爵で、庶民のアオイとの恋愛など現実的でない。立場的にも討伐中は多忙のはずで、恋愛どころじゃない。そもそも任せられる相手がいらない。

ゲームでの団長の攻略法は「主教と団長が敵対した時に主教を庇う」というもので、俺はもちろん、身内の神殿騎士も使えない。

彼は放置でいいだろう。そう思っていたのだが、格好いいなどとアオイが言っていたのが不安になってきた。

やはりBLゲームの世界というべきか、この世界は圧倒的に女性が少ないし男性同士の恋愛がめつぽう盛んだ。ゲームの強制的な不思議な力が発動するかもしれないし、現実的じゃないことだって起こり得そうだ。実際、王太子だって妙な行動を見せていたのだ。

アオイは騎士団員みんな格好いいとも言っていた。ガタイのいいタイプが好みだとしたら、線の細い俺が粉をかけても難しいかもしれない。やはりアオイの気を引くのはイリスに頑張ってもらおう。

では団長はどうするか。やはり関わっておいたほうがいいだろうか。

立場的なことを考えると――担当は俺だよな……

団長に嫌われている俺が彼の気を引くなんて、どう考えても無理だと思うが。

いやしかし、嫌いな男というのも有利に働くか？ なんにも恋愛的な方向でなくてもいいんだ。要はアオイに関心が向かないようにすればいいのだから。

まあアオイの件は抜きにしても、これから旅をしていく責任者に対し、少しはコミュニケーションをとっておくべきだろうとは思う。

嫌われている相手に自分から関わりに行くって、憂鬱ゆううつでしかないんだが……。はあ。

考えると溜息しか出てこないが、しかたがない。

俺は馬に水を飲ませている団長に近づいた。俺に気づいた彼がこちらに目を向ける。なにか用かと言いたげな無愛想な表情。怯みそうになるが表面上は微笑んで、おっとりと話しかける。

「騎士はこれだけの人数なのですね。もっと大勢で行くのかと思っていました」

「魔物との戦闘は、これくらい少数のほうが動きやすい。市民の避難誘導などは、地元じよんの騎士団に任せる」

「そうなのですね。近衛騎士団も、討伐は初めてではないですね」

これまで王都で魔物が出現したことはなく、俺は戦闘の様子を見たことはないのだが、近衛騎士団が過去に何度か、精鋭部隊を地方に派遣していたことは耳にしている。

俺の言葉に、たんに無愛想だった彼のまなざしが刺々しいものに変わった。

「去年まで、何度も遠征している。主教は、初めてだな」

「はい」

「……言うことは、それだけか」

団長が忌々しそうに言う。黒い前髪の下にある瞳がギラリと光った。

「やっと神殿から出てきたと思ったら、ぬけぬけと……。今回は陛下の命で、さすがに断れなかったか。浄化者がいるなら、要請に応じてもいいと思ったか」

「どういう意味ですか」

「魔物との戦い方がわからず、多くの死傷者を出していた頃、主教に何度か出動を要請している。忘れたか」

それは初耳である。俺は瞬きして尋ねた。

「出動の要請とは？ そんな話は、初めて伺いました」

「なんだと」

団長が眉を顰めた。

「現近衛騎士団団長の話だと、要請したが断られたとのことだが」

「要請したのは、どこにでしょう」

俺は首を傾げて少し考え、思い当たることを告げた。

「神殿に直接ではなく、宰相や陛下に訴えたのでしたら……握り潰されたのかもしれませんが」

「握り潰された？ なぜ」

「治癒魔法を使える者が、王都には私一人しかおりませんから。陛下は私が王都から出ることを嫌がります。私が不在の時に王都に魔物が出現したら困るを考え、要請を無視した可能性が強いですね」

「そんな、まさか」

「いえいえ。見ていればわかるでしょう。そういう方々だと」

敵方の近衛副団長相手に国王への不敬発言。危険ではあるが、信用を得たかった。

団長が硬い表情で俺を見つめる。そして唸るような低い声で尋ねた。

「……要請があなたに届いていたら、参加していたのか」

「それはもちろん。断る理由がありません。私のほうからも申請していたのですから。必要があればどこにでも向かうと陛下に直接お話ししたこともありますし」

さらりと答えると、彼のオリーブ色の瞳が揺れた。

どうやら俺の意思で出動を拒んでいたと思われていたようだ。ここ数年睨まれていた理由は、もしかしたらこれが大きかったのかもしれない。こういった行き違いは王宮ではままあることなのだが、溜息が出る。

団長の動揺ぶりを見ると、きつと、治癒魔法を使える俺が参加していれば救えた命があったのだ

ろう。たしか彼の父と兄は討伐で亡くなっていたはずだ。胸が痛む。

今回に限って俺の参加を国王が許したのは、浄化者アオイの命を守るためだ。さすがに陛下も、ようやく見つけた浄化者に戦闘中死なれたら困ると思ったのだろう。

「……それが本当なら……」

団長は呟くように言いかけ、馬のほうへ顔を向けた。彼の愛馬が水を飲むのをやめ、軽く嘶いたのだ。団長が馬の首を撫でる。

「ローガー、充分に飲んだか」

愛馬の名はローガーというらしい。黒毛の立派な馬だ。この世界の馬はサラブレッドより大きく、気性も荒い。ローガーはそこの中でもひときわ大きく、顔つきも厳しい。いかにも団長の馬という風格があった。毛並みは美しく、よく世話をされているのがわかる。

飲んだよ、と返事をするようにローガーが団長へすりすり顔と顔を寄せる。よく懐いており、彼を信頼していることが伝わる。

前々から彼の評判はよく耳にしている。無口で無愛想だが団員からの信頼はとても厚い。こうして馬から信頼されている様子を見ても、身内を大切にする男なのだろう。

「いい馬ですね」

「こいつはこんな厳つい顔をしているが、人懐こいし従順だ」

自分の馬を褒められるのは嬉しいらしく、団長の強張っていた顔がわずかに緩んだ。

「撫でてもいいですか」

「……。ああ」

今、ちよつと躊躇ったな？ 俺に愛馬を触られるのは嫌か？

「馬に変なことはしませんよ。ローガー、触ってもいいですか。嫌だったらごめんなさい」

馬にも声をかけ、首を優しく撫でる。

団長が変な目でこちらを見た。

「なんですか」

「馬にも敬語なのだな」

「それは……もう癖ですね」

いつもだったら「神に使える者の端くれとして万物に敬意を払っておりますから」などと言っていたところだ。が、そういう発言が胡散臭く思われるのかもと思って本音を言ってみた。

神官になって十四年。この口調が基本仕様になっているだけである。神官らしさを演出するためには必須だと、見習い時代に叩き込まれた。心の中の独白との乖離が激しいと我ながら思うけどな。「馬はね、運動音痴なので乗るのが怖くて。こうして近づくのも緊張しますが、見る分には好きなのです。いい子ですね、ローガー。きみは格好いいですねえ。毛並みも綺麗ですよ」

将を射んと欲すればまず馬を射よ、である。とりあえず笑顔で褒めておく。自分の馬を褒められて悪い気はしないはずなのだ。これくらいのことで距離が縮むとは思わないが、嫌われている相手の取っ掛かりとして無難だろう。

団長は俺を観察するように見ていたが嫌な顔はせず、満足するまで撫でさせてくれた。

「そろそろ出発する」

やがて出発の時刻となり、団長が団員達に号令をかけた。

アオイとともに馬車に乗り込み、まもなく隊列が進みだす。

ブドウ畑が車窓から流れていき、牧歌的^{ぼっか}だった景色はオーミヤが近づくにつれ、再び建物が増えだした。

王都の東に位置するオーミヤへ到着したのは予定より早く、日暮れにはまだ早い時刻だった。

ここオーミヤで魔物が出現しているという。最初の討伐予定地だ。

教会前広場にて馬車から降りると、出迎えた領主や神官、周囲の者の目が俺に集まり、少なからずざわめきが起こった。「綺麗……」「あれが……」などという声が耳に届く。美貌の金の亡者^{もうしや}という異名を持つ俺である。この世界基準で美人なのは事実だし、国教会を富ませたのも事実だ。周囲の反応は日常のものであり、俺は意に介さず、団長と共に挨拶を交わす。

それから地元の騎士団と合流し、討伐の打ち合わせに入った。

「魔物を倒すまでは、浄化者アオイは主教と共に後方で待機。護衛兵には、討伐騎士団からはエヴァンス、ロランをつける。魔物を倒したのち、アオイに出てきてもらい、浄化作業をおこなってもらう。魔物が復活するまでの時間は短い。速やかな移動を願いたい」

団長の説明ののち、広場にて合同訓練を簡単におこなう。俺はその光景を後方から眺め、攻略対象者の様子を観察する。団長は言わずもがな、他の三人も群を抜いて切れのよい動きをしていた。小柄で童顔のフルニエも戦闘になると格好いい。さすが恋愛ゲームの攻略対象者なだけはある。

ヒーラー達の使える魔法は、四人とも戦闘に関するものだ。訓練中にも魔法による火花が散っていて、迫力がある。

俺が連れて来たイリスも他の団員に馴染み、後れをとることなく動いていた。団員同士で交流する時間も、訓練する時間も、削ってしまったのは俺。普段から慣れている近衛騎士と違い、神殿騎士の二人には苦勞をかけると思っていたのだが、見た様子では問題なさそうだ。

その後、騎士団一行は街はずれの宿場へ移動した。一軒貸し切りで、今夜はそこに泊まることになっている。地元騎士団の宿舎や教会ではないのは、魔物の出現場所が街はずれであるとの情報から、出現時、速やかに現場に直行するためである。

領主と挨拶した際、俺と団長だけでも領主の屋敷に泊まるよう勧められたのだが、団長は素気なく断っていた。真面目な男だ。

一階の食堂で夕食が出るとのこと、アオイをイリスに任せようとしたら、イリスはユベルと共にいた。しかたなくアオイとテーブルに着くと、あとから来た団長が俺の前にすわった。

しばしの沈黙。他の団員は遠慮して、俺達から離れてすわる。

俺は手をあわせ、小さな声で食前の祈禱を捧げた。この国の宗教は太陽神。「国教会」「主教」という名称を使っているがキリスト教ではなく、その教えは日本の自然信仰や神道に近く、神官の結婚は許されている。同性愛にも寛容なので、異性カップルと同じくらい同性カップルも存在する。ただ同性同士での結婚は国も教義も認めていない。

俺は国教会のトップという立場にあるが、正直、信仰心は篤^{あつ}くない。完全にビジネスとしか捉え

ていない。食膳の祈祷など人前でしかない。今後は「いただきます」「ごちそうさま」の日本式に変更してもいいかなと考えたりもする。

「主教様のご祈祷が聞けるなんて。しかもご相伴しよばんに預かることができるなんて」

簡略な祈祷を終えて目を開けると、アオイは感激した様子で俺の横顔を見つめ、頬を紅潮させ、両手を握り締めていた。金の亡者もうしやという俺の噂は彼の耳には届いていないらしい。団長のほうは胡乱ろんまなざしで俺を一瞥し、食べはじめる。いちおう俺の祈祷が終わるまで食べはじめるのを待っているらしい。

俺は「いつも穏やかで優しく慈愛に満ちた主教様」という聖職者面をしているが、完全に演技だ。神官になるなり前主教から演技指導をされてきたおかげで外面のよさが板についているが、内実は普通の男だ。詐欺師のようだと思っていたが、前世を思いだした今はこれって特別なことじゃなく、営業マンと同じじゃないかなと思ったりもする。

団長はまだなにか思うところがあるのか、疑わしげな視線を送ってくる。俺は団長が警戒するような、大層な男ではないのに。

「そんな大したものではありませんよ。さあ、食べましょう」

俺はアオイに微笑んで食事を促した。

夕食はパンとチーズとオムレツ、野菜スープ。

食べはじめてまもなく、団長がアオイに話しかけた。アオイの故郷のこと、両親のことなど他愛もない話が続く。一般人である彼の心を解すための話題選び。そしてこれからはじまる討伐の話題

に移り、アオイが不安を漏らすと、団長はまっすぐまなざしで力強く答えた。

「案じる必要はない。浄化できなかった場合は、退却すればいいだけの話だ。アオイの身は、我々が守る。我々の戦闘中は、観劇でもしているつもりで見物していればいい」

「団長……」

頼もしい言葉に、アオイが頬を染める。好感度を上げさせてしまった。

まずい流れだぞと思いつながら俺は今夜のことを考える。

宿は一部屋に二人で泊まる。今後、宿でなく地元騎士団の宿舎に泊まることも出てくるが、いずれも一部屋に二人というスタイルだ。

ゲームでは、アオイと同室になる相手は当然攻略対象者で、翌日の戦闘後の魔力供給の担当となる。好感度ポイントが最も貯まるのが、この部屋割りだ。ゲームではプレイヤーが選択したが、ここでの決定権を持つのはオウギュスト団長だ。

「団長。今宵の部屋割りですが、アオイを一人部屋にできませんか」

試しに言ってみたら、怪訝な顔をされた。

「アオイを？ あなたではなく？」

「ええ。一人でゆつくり英気を養えませんか、浄化作業に支障が出るかもしれません」

「え、主教様。ぼくはべつに、二人でも大丈夫ですよ」

アオイよ。お願いだから今は黙っていてくれ。

「警護が必要ならば、神殿騎士団のイリスにしていたきたいのですが」

「部屋は、もう決めてある。不測の事態に備えて、アオイはヒーラーと同室がいいだろう。今夜はユベルと同室だ」

ユベルなんて困るんだが。と言いたいが、理由を話せないで強く言えない。アオイは神殿預かりなので、などという主張を試みたところで、じゃあヒーラーのエロワと、ということになるだろう。ユベルがエロワに替わったところで意味がない。

団長はアオイを見る時と異なり、^{すが}睥睨したまなざしで俺を見おろす。

「神殿騎士団から来たエロワとイリスはこの騎士団に馴染んでほしいので、別の団員と同室にする。あなたと同室になる団員は気を遣うだろうから、あなたは、俺と泊まってもらう」

「……それはそれは。ご配慮痛み入ります」

オウギユスト団長はおそらく、俺がなにか目論んでいると警戒している。最初の謁見室でよい口を挟んだせいだな。自分と同室にしたのは俺を監視下に置きたいためだろう。俺が過去の遠征で出動を拒んでいたという誤解は解けたかもしれないが、俺に対する彼の警戒はそのことよりも、王宮で見聞きする噂にまつわることと思われる。

俺が団長と同室になることはかまわない。団長がアオイに近づかないのは助かる。しかし、こうも警戒が強いのはやつかいだ。

俺の提案にはすべて裏があると勘繰られ、拒否されそうな様相。人事権に口を挟めるように、懐柔する必要があるそうさ。

いちおう俺は、絶世の美貌と^{うた}謳われる容姿を持っている。淡い金髪に藤色の瞳、はかなげな顔立

ちと細身の身体。ついでに権力も金もある。

色仕掛け……やつてみるか？

団長もBLゲームの攻略キャラなわけだし、男は絶対無理ってことはないだろうし。

でもなあ。相手は堅物で有名な団長。しかも俺を嫌っている。誘惑なんて無理だよなあ。

よいいなことはせず、このまま警戒し続けてもらったほうがいいか？ 俺を警戒し、最大限関心を向けてくれたら。

でもずっと警戒されてるのも疲れるし。懐柔できたほうが楽だ。

もし俺がそこまで警戒する必要のない男だと気づいてしまったら、俺への関心が薄れる。恋愛にかまける余裕が出てしまつてはまずい。

んー。

他の攻略対象者の対応策は秒で決めたのに、団長への対応は方向性すらなかなか決まらない。

どうするかあれこれ迷い、結局結論が出ないまま夕食を終えた。

団長と共に宿泊部屋へ入ると、団長が照明を灯した。

この世界は電気や石油の代わりに魔力や魔石が動力となっている。照明は魔石を使った魔道具で、魔力のない者でもつけられる。

俺はこのような地方の安宿に泊まることは初めてで、室内をきよろきよろ見まわしながら足を進

めたら、なにもないのに躓いた。

「あ」

転びかけた俺を団長がとつさに片手で支えてくれる。細身とはいえ成人男性の身体を片手で支えてもびくともしない逞しさと安定感。さすがだ。

身体はすぐに離された。

「すみません。ありがとうございます」

礼を述べたが、返事はない。

彼にとっては礼を言われるほどのことでもないのだろうか、とりつく島もない。

室内はベッドが二台あり、ベッドのあいだに小さなサイドテーブルが置かれている。それ以外にはものを書くための机もない。俺は荷物を床に置くとベッドに腰かけ、持参した書類を広げた。神殿の仕事だ。団長のほうも持参した書類に目を通している。

会話は一切ない。しばらくして湯の入ったビッチャーと大きな盥が部屋に届いた。

旅の宿では浴場は滅多になく、身体を清めるには盥で湯浴みする方法が一般的だ。

生活魔法で湯を温めることはできるので、配管さえできれば各部屋に浴室を設けられ、盥をいちいち運ぶ必要もなくなるのだが、配管工事は多額の工事費がかかる。庶民の宿で費用を捻出することとは難しく、普及には至らない。

部屋に衝立などはない。同室者がいるこの場で身体を洗わなければならない。

「団長、冷めないうちにどうぞ」

声をかけると、団長が頷いて立ちあがった。

騎士団服を脱ぎ、シャツを脱ぐと鍛え抜いた大胸筋が露わになる。すべて脱ぎ捨て一糸まとわぬ姿になると、湯で身を清めはじめる。その姿を俺は遠慮なく眺めた。

無駄のない逞しい身体は美しく、色気があった。胸筋がすごい。引き締まった腰まわり。上腕二頭筋もいい。本心に、戦うために作られた身体だ。男が羨む肉体美。はあ、格好いいな。さすが剣の神に愛された男と呼ばれるだけあると、しばし見惚れた。

団長が湯浴みを終わると宿屋に湯を交換してもらい、次に俺が使う番となる。

少しだけ、躊躇う気持ち湧く。温泉や銭湯などで裸になるのはさほど気にならないのに、二人きりの密室という場で裸になって身体を洗うというのは、なんか違うんだよな。室内だし、水音とか気を遣う。

しかも団長の素晴らしい身体を見たあとだ。自分の貧弱な身体を晒すのは勇気がいる。恥じらうような歳でもないし、パパッと終わらせたい。

ふと、裸になるのだし、この湯浴みをきつかけに団長の気を引くことができれば、なんてチラリと思った。

いや、やつば無理だな。イリスには誘惑しろと命令しておきながら自分ではできないなんて、ずるいと思うけれども。イリスは若いし魅力的だから。相手は俺を嫌う団長だし。俺はいくら綺麗と言われていてももう三十路だし。

そもそも誘惑なんて、どうやればいいのか。

今世でも前世でも社畜だが、前世では仕事が忙しかっただけでなく単にモテなかったから恋愛で
きなかった。今世ではモテすぎて、鼻息荒い周囲が気持ち悪くて恋愛に興味を持てなかった。性交
渉どころかキス一つ経験がない。当然誘惑した経験などない。

頑張っただけにしてみただけで、胡乱な目を向けられるだけだろうことは容易に想像がつく。
やはり余計なことは考えるべきでない。俺は団長に背を向けて法衣を脱いだ。くるぶしまである
ワンピース型の法衣の下にはシャツとズボンを着ている。脱いだ法衣を軽くたたんでベッドへ置い
た際、団長がこちらを見ていることに気づいた。目が合いかけて、さりげなく逸らされた。だが俺
が背を向けると、背中に視線を感じた。

ん？

えーと。まさか団長、俺の裸に興味があるのか？ ただ単に動いている物体に目がいく心理？
普通、あまり見ないようにするものだと思うんだが。そう言いながら俺のほうこそがつり団長
の裸を見ていたからな。人のことは言えない。

気づかないふりをしてシャツを脱ぎ、ズボンに手をかける。

そのあいだもずっと背中に視線を感じる。うーん、やりづらい。やっぱり見るなど言ってしまう。
俺は首を捻り、肩越しに彼の足元の辺りへ視線を向けた。

「あの……、あまり、見ないでいただけますか……？ 私は団長のような素晴らしい肉体ではない
ので……」

三十路の男のくせに恥じらう気色悪さに我ながら羞恥を覚え、耳が赤くなった。

「ああ……悪い」

団長がこちらから顔を背ける。

俺も団長の裸を見ていたのにな。こちらこそ悪い。

背後で書類を捲る音が聞こえだし、俺はズボンと下着を脱いだ。そしてバスタブ代わりの盥に足
を入れる。湯が跳ねないように膝をついてしゃがみ、湯を含ませた手拭いで肩を拭う。入浴という
ほどしつかり湯に浸かれるわけではないが、汗を流せるのはホッとする。一日馬車に揺られて疲れ
ていた心身が緩んでいく。

「は……、気持ちいい……」

溜息交じりに漏らしたら、背後で書類を捲る音が止まった。

声をかけたと思われたかな。すまん、ひとり言だ。

その後は手早く湯浴みを終え、身支度を整えた。

「私はこれで休みますが、団長はまだお仕事ですか？」

「ああ……俺も休む」

彼は手にしていた書類を脇にやり、ふと動きを止めた。言いよどむような間を置いてから俺を
見る。

「一つ、訊きたい」

「はい」

「主教は、アオイをどうするつもりだ」